

Special Essay

20年後の大学図書館

分子生命科学研究所
細胞工学研究部門
高橋 考太

久留米大学にお世話になるようになってから、はや6年半になりますが、申し訳ないことに、この間、久留米大学医学部付属図書館に入館したのは3回だけです。これは私どもの分子生命科学研究所が百年公園内にあって、空き時間に気楽に図書室に立ち寄りにくいということや、今の時代、研究に必要な専門色の強い文献は、ネット検索で入手可能であることに起因しています。もちろん文献入手の電子化整備については、図書館スタッフのご尽力によるものですから、図書館には日々お世話になっているともいえますが。このような塩梅なので、「図書館だよりに何か寄稿せよ」とのご依頼をうけてもただ戸惑うばかり。しかしどのような内容でもよいとのことですから、それならば小学生の作文の宿題のごとく、大学図書館の20年後の未来像（分子生命科学研究所は来年設立20周年ですから）について、以下、勝手な妄想をしばし綴ってみることにします。

昨今の情報化の爆発的進展を目の当たりにしますと、書籍のネット媒体への移行は避けられない傾向でしょう。事実、専門誌の電子化はほぼ完了していますし、今後は蔵書の電子化が進むものと思われます。如何に効率よく日々増殖する文献を整理し、電子的に簡便に利用できるようになるのか、それが大学図書館のひとつの使命になるでしょう。20年後には、大学図書館に直接通わなくても、外出先（海外であっても）から、図書館にアクセスして正確な電子文献情報を無駄なく得ることができるようになるでしょう。しかし、本来図書館は古書の匂いに包まれながら、午後の思索を静謐な空間で楽しむといった贅沢な知的作業の場でもあるはずで、大学図書館にひとたび足を運べば、自然と知的なインスピレーションを得ることのできる、しかし気取らないリラックスした場所であること、それが私の期待するもう一つの未来の図書館であります。そのためには、静かに一人本を読むという図書館像を捨て去る必要があるかもしれません。異分野の研究者が自由に討論に参加できる知的サロン、そんな大学図書館のイメージはどうでしょう？これもネット会議のような通信環境を整えれば、意外と簡単に実現できるかもしれませんよ。ネット界に瞬く間に広がった巨大掲示板のアカデミック版とでもいえる空間。20年後の定年間近の自分。ちょっと図書館に足を運んで宇宙物理の専門家サロンにアクセス、宇宙と生命の起源について勝手気ままにおしゃべりしている姿などを夢想しながら、この駄文、このあたりでログアウトしたいと思います。

